

徐琳『蒼山洱海の恋 玉龍雪山の情』⁽¹⁾

夫，茲嘉を憶う（傅懋勳先生の生涯）

曾 根 博 隆 訳

訳者前言

作者の徐琳先生は中国社会科学院民族学與人類学研究所（旧民族研究所）研究員であり，故傅懋勳（字，茲嘉）民族研究所副所長・中国民族語言学会会長のご夫人でした。

徐琳先生は中国雲南省大理白族自治州劍川県喬後井のご出身で，1922年11月13日生まれです。徐琳先生は1987年末に研究員を退職し，翌1988年9月にはご主人の傅先生をなくされました。傅先生のご逝去は徐先生にとって大打撃ではありましたが，その後も中国少数民族語言学会常務理事などお仕事を続け雲南で言語調査などをされ，時には災害に出会い運よく逃れるなどのご苦勞を重ねながら，白族の言語，文学の研究や僑僑（リス）族の言語と民間文学の研究に尽くされておりました。

徐琳先生は日本，フランス，オランダ，米国などを訪れて学术交流をされており，高齢になっても元気に活躍されておられましたが，2005年8月9日に享年83歳で永眠されました。

徐琳先生と傅懋勳先生のご遺骨は一緒に埋葬されたとのことでした。

この徐琳先生の書かれた傅懋勳先生の思い出を翻訳し，ご夫婦お二人を偲びたく思います。

どうかお二人で安らかに眠りください。

するとのことでありました。

1. 蒼山洱海にて知り合う

47年前の新春に私は冬休みを終え，三日の道程を経て故郷の喬後から喜洲鎮に帰り，染衣巷の華中大学⁽²⁾の女子学生宿舎へとまっしぐらに駆け戻りました。翌日早朝には大慧寺の大学本部に到着を届けました。

当時，私は華中大学中国言語文学部2年生でした。大雪に山道が閉ざされて数日遅れてしまい，私が恐縮しながら学部事務室の建物に入っていました。私に会ってくださったのは学部長の包漁莊教授⁽³⁾ではなく，一人の単衣の服を身につけた上品で礼儀正しい若い教師でした。その教師によると，今学期に新設された言語文字学は彼が担当

この新来の先生は私が白族⁽⁴⁾で，母方の祖母が納西族（ナシ族）⁽⁵⁾であることを知ると，納西族と白族の言語と習俗について詳しく尋ねるとともに，麗江に対する憧れを述べられました。

言語文字学の最初の授業に出席すると，新しく見えた先生は学生たちに方言で中国語の声調を読ませました。北方出身者は陰陽上去の四声を読むことができ，白族が中国語を読むときには入声の声調をまだ残しており，広東人は八つの声調を読むことができました。

先生は私たちが音声进行分析記録することを助けて下さり，みんなが自分の方言と標準語との異同を把握できるようにしてくださいました。先生は標準語で教えてくださり，言葉は明瞭で，声調は

メリハリを利かせておられ、教室ではゼミナール式の問答に加わり雰囲気は非常に活発でした。新しい先生の開かれた「大涼山彝族の社会と言語」の授業は多くの聴衆を引き付けました。私にとっては、現実生活における奴隷社会の形態は今まで聞いたこともないものでした。この時から私は民族学に興味を覚えました。

華中大学は学生の成績に対し厳しい要求をし、学校の規定では4学期学ぶと中間試験がありました。主に中文、英文と専門科目2科目で、合格して初めて3年生に進級できました。しかし私は、入学前に高校で1年間勉強しただけでした。私が中学3年生の時に盧溝橋事変が起きました。愛国心に駆り立てられて、私は何人かの学友を誘い、新華社駐武漢事務所、丁玲女史、毛沢東主席に前後して手紙を書き、延安抗日大学で勉強することを要求し、その返事を受け取りました。1938年に私たちがこの上なく興奮した気持ちで昆華女学校⁽⁶⁾を離れ、貴陽に達した時に足止めをされました。私たちはやむを得ず江西、湖南に行き雲南第一集團軍58軍政治部に参加して、1941年夏に雲南に帰るまで抗日宣伝の仕事に参加しておりました。1942年に私は同等の学力ということで華中大学に試験を受けて入学しました。入学後、中国語学文学科の課程は学んでもまだ楽でしたが、ただ英文学だけは学ぶのに些か困難でした。

この学期は私にとっては肝心の学期で、力を集中して英語を補習しなければならず、どこに恋愛問題を考える時間があるでしょうか。しかし、新しい先生と知り合った後、彼は授業から宿舎に戻る道でよく私を待って話をし、さらに私を彼の宿舎で英語の補習をするからと誘ってくれました。まもなく、彼は私に対して末永く仲睦まじく暮らしたいと申しました。

この縁談は包漁荘先生ほか語学文学科の何人か

の先生が気にかけてくださいました。包先生の奥様はさらに私の母に喜洲に来て婿となるものに会ってみようお手紙を書いてくださいました。母親は来てから数日間の観察をして満足しました。私も彼に対する印象がよかったです。一つには、彼はミッションスクールで教えておりましたが、服装や言行に飾りがなく郷土色を残していたからです。二つには、彼は少数民族文化に特別な感情を抱いていたからです。確かに、旧社会では少数民族は差別視されていましたが、彼は純真な愛情を一人の白族の娘に捧げたのです。

このようにして私たちは愛し合いました。長年彼は単身で流浪の生活を過ごしており、胃病を患っておりました。彼は新しい家庭を築くことを切実に願っておりました。しかしながら、華中大学にはある不平等の規定があり、既婚の婦人は入学させない、在学中に結婚すれば必ず退学しなければならないというものです。私は困難な選択に直面しました。韋卓民学長⁽⁷⁾は私に、「あなたは今後正式な学生ではないけれど、あなたがいかなる授業でも聴講することを歓迎します」と言っていました。私は考えた後、学業を放棄することに決めました。

1944年6月喜洲上洪坪の華中大学教員宿舎で私の姉婿の馬曜が家族を代表して私たちの簡単な婚約式を取り仕切りました。8月に大学の講堂（大慈寺の正殿）にて、韋学長が証人として、陰法魯、王玉哲両先生⁽⁸⁾が媒酌人として結婚式を執り行いました。

2. 西南民族の言語と文学に対する ひたむきの愛情

先に述べた私の先生で、かつまた私の夫は、名字を傅、名前を懋勳、字を茲嘉といい、山東聊城



1980年8月東京にて
(左：徐琳先生，右：傅懋勳先生)

の出身です。彼は1911年に莒県で生まれ、先祖は皇廷御史をしておりましたが、父の代に至っては家が零落し、土地改革の時には中農に区分けされました。茲嘉は少年時代進歩的な思潮の影響を受け、学生愛国運動に参加したことがありました。彼は1935年北京大學中国言語文学部に入学し、羅常培教授⁽⁹⁾に師事して言語文字学専攻として学びました。抗日戦争が勃発すると、彼は学校が転々と移動するのに伴って雲南に参り、蒙自に設けられた西南連合大学文学院⁽¹⁰⁾に学びました。この時茲嘉は羅常培教授の指導の下、彝語の勉強と研究を始めました。蒙古族の一部がなぜ蒙古語を捨て去り、彝語に近い方言を操るようになったかを明らかにするため、彼は蒙古族の集まり住むところに深く入って研究を行いました。

1939年文学院は昆明に移り、茲嘉は卒業論文『蒙自付近俚語研究』を書き、それによって少数民族の言語と固い絆を結びました。大学卒業後、彼は北京大學文科研究所の修士大学院生に合格しました。彼の指導教員は羅常培先生、李方桂先生⁽¹¹⁾で、丁声樹先生⁽¹²⁾も研究所におられいつでも教えを請うことができました。彼は朝早くから夜遅くまで一心に学びましたが、しかし生活は苦しかったのです。奨学金には限りがあり、長期の栄養不良のため、羅先生の事務室で気を失って倒れたこともありました。彼はさらに学校に通っていた弟に仕送りをしなければならず、そこで中途退学し華中大学の招聘に応じ、入学してわずか2ヶ月の研究所をつらい思いで離れることになりました。

1939年茲嘉は招聘に応じて武昌から大理喜洲鎮に移転した華中大学中国言語文学部に参り教員を務めました。彼はすぐにこの山紫水明の白族の故郷を愛し、白族の歴史文化に強い興味をいただきました。彼は言語文学部の肖呂南先生と一緒に「山花碑」に発音をつけて翻訳し、喜洲白語の記録を記録しました。彼はさらに休日を利用して大理師範学校に行き維西么西族の王燦さんの言語を記録しました、これは彼の納西語の勉強と研究の初めです。1940年の夏休み、彼はまた昆明に行き永仁県の栗坡語と昆明近郊の彝語の調査を行い、『栗坡語研究』と『昆明附近的一種夷語研究』の二つの論文を書き上げました。

1941年に茲嘉は四川の華西大学文化研究所⁽¹³⁾の助教授に招聘されました。1943年2月に彼は大理へ帰る途中に、大涼山冕寧、喜徳など地域に深く入り多くの彝語の書籍(手書きの本)を調査収集して、多くの格言ことわざ、物語伝説と父子連名の支系家系図を記録し、多くの彝族の友人と付き合いました。羅榮高さんや竹金明さんは彝族

の名前——「羅洪水呷拉合」を彼に付けてくれました。彼はこの名前を彝語と漢字の印鑑に彫って、彼が彝語の文章を書く時にはいつも彝語の印鑑を押すのを好んでおりました。

茲嘉は大涼山での数ヶ月で彝語とその文字を習得してしまいました。当時国民政府西昌行轅（軍営）ではちょうど彝族同胞に政令を宣伝するものがいなかったため、彼を文化専門要員に招聘しました。このようにして彼は田舎に行き言語を調査するとともに、一部の宣伝材料を編纂し、彝語で書き換えた抗日歌曲を彝族同胞に歌えるよう教え、彝族同胞に歓迎されました。彼は西昌行轅のために、アヘンを植えるのを禁ずる告示を訳して彝族地区に貼り、併せて西昌で彝語とその文字を使える幹部クラスの養成も行いました。彼を助けた発音協力者の傅正達氏はキリスト教の賛美歌を彝語に翻訳しました。茲嘉は涼山の調査資料で『西昌夷語会話』を書きました。1943年末に彼は喜洲に戻り『大涼山夷語音位系統』、『夷族伝説的創世記』、『夷文列仙伝研究』、『夷族的諺語研究』、『夷文思郷詩兼論其韻律』、『説話者の性別対夷語親族称谓的影響』等の専門書と論文を書き上げました。茲嘉は華中大学に戻ってから1944年2月に包漁荘先生に代わって学部主任の職に就き、1945年に教授となりました。

3. 納西文化の宝蔵を探索する

茲嘉は1940年から1943年にかけて、成都で「么些語研究」（発音、文法、語彙の3冊）を出版しました。これは彼が彝語支言語を学習研究した専門書で、わが国で納西語を系統的に研究した比較的早い著作です。納西語の研究の基礎の上に、彼は自ら納西族特有の東巴文（トンパ文字、象形文字、絵文字ともいう）と哥巴文（音節文字）を

学びにいきたいと強く願っていました。1945年夏休みになると直ぐに彼は大学に一部補助金を申請し荷駄隊とともに旅のつらさや野宿の苦しみも物ともせず、納西族の政治、経済、文化の中心である麗江県大研鎮に行きました。当時私の姉婿の馬曜はちょうど麗江で働いて居り、生活上、仕事上ともに彼に大きな援助を与えました。特に納西族の和栄昌先生にお願いし彼のために納西文字に造詣の深い中和村の和芳という経師（経典を教える人）⁽¹⁴⁾を見つけました。茲嘉は先ず和芳経師の言葉を最初から記録し始め、中和村の納西語の音位系統を帰納して、それから東巴文を学びました。彼は何冊かの経典を選び、和芳経師に読んでもらい、一字一字国際音声記号で記録し、意味を解釈してもらいました。この様な豊富多様な納西文字に触れて、彼は熱中して寝食を忘れ、この貴重な民族文化の宝蔵をよく研究発掘しようと決心したのでした。彼は姉婿の資金援助を得て、若干の納西語経典を購入しました。まさにこの時に抗日戦争に勝利した知らせが麗江に伝わり、人々は勝利の喜びの中に浸りました。

1946年春、華中大学は授業を停止して陸路で武昌に戻ろうとしておりました、茲嘉は学部の図書資料の運搬の処理がすむと、私たちは喬後の故郷に戻り、彼は和芳経師を家まで招いて続けて東巴文の研鑽に努め、9月の華中大学開講時になってようやく武昌に戻り授業をしました。授業や卒業論文の指導さらに学部の行政事務は比較的忙しかったですが、彼は勤務時間以外の時間を使って納西族の『創世記』を研究しました。1947年の夏、私たちは中国の三大スラブ⁽¹⁵⁾の一つ武漢に住んでおり、大学の教師はほとんど他所へ避暑に行っておりました。茲嘉だけは机に向かって彼の愛する経書を書いておりました。私は彼がびっしょり汗をかいているのを見ても拭う暇も無いた

め、彼を扇いであげました、彼は「私は暑いのは厭わない、自分を扇きなさい。心が平静であれば暑さも自然に感じなくなる」と言いました。この『創世記』は彼が「麗江么些象形文『古事記』研究」の題で、1948年武昌で華中大学から出版しました。すべての絵と文は彼が絵を描き、文を手書きで石版印刷しました。孫竹氏は『当代中国民族語言学家』⁽¹⁶⁾の中で茲嘉の研究成果を紹介して次のように述べております。

「『古事記』は納西族経書の中で持つとも著名な一つで、「麗江么些象形文『古事記』研究」で研究しているのは、この『古事記』の写本です。作者は国際音声記号でそれぞれの東巴経文に読み方を表記し、先ず一字一字、語または語素の意味あるいは文法的機能について明記し、更に意味を中国語に訳しています。その上経書の言語と文字構造に比較的詳細な解説しています。本書はこの経文の科学的記録と完全な訳文の最初のもので、またこの経文の最初の研究著作です。これは納西族の文化歴史研究の重要な成果であり、そして一般文学發展史研究と古代象形表意文字の解釈に重要な参考材料を提供しています。この著作はさらに経文中に使用されている古語に古今対照の方法で、一つ一つ説明を加えている。これは納西語發展史の研究と同系属言語の比較に大きな手助けになります。このほか、この経文は實際上、納西族の一冊の民間文学写本であり、このためこの経文の全面的研究は民間文学研究に対しても一つの貢献です」。

その後さまざまな原因で、茲嘉は東巴文の研究を1979年まで中断していましたが、この時雲南での言語文字工作会議に参加した時に、時間を無駄にせず寧蒗県に行って納西語を調査しました。彼は元々麗江に少し多く滞在したかったのですが、社会科学院は彼が中国言語学者代表団を組織して

パリに赴き第12回国際漢藏語学会にでることを望みました。茲嘉が提出した論文『納西族の母系家庭和親屬称谓』はフランス語、日本語に訳されそれぞれフランス「Cahiers de Linguistique Asie Orientale」(Vol. XII, No.1, juin 1983)と日本「中国研究月報」(44巻, 1990年7月号)に掲載されました。

1980年に招きに応じて、日本を訪問した茲嘉はやっと比較的まとまった時間ができ40年代に収集し、「文化大革命」での災難を逃れた納西族東巴経『白蝙蝠取経記』を編集し注釈をくわえました。「納西族絵文字『白蝙蝠取経記』研究」という題をつけ、日本東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所から出版しました。製版が比較的困難なため、本全体をみな彼の手書き原稿で作りました。彼は毎日机に向かってその文字を描きましたが簡単ではありませんでした。経書の中で長期にわたって懸案となっていた二つの方向の確定できなかった問題を解決できました。まさに中国系フランス人学者遊順釗教授が茲嘉を追憶して述べているように、「この出版は何十年も遅れ、学術上も傅先生にたくさんの余計な試練を与えた。数十年前の研究成果がいまやっと出され同じ分野のものに直面した。もしも当時フィールドワークがいささかでもいい加減であったなら、この時間的な試練に耐え切れなかったであろう」。

彼が亡くなる直前の数年間は、彼が第一線を退いていささか時間がありました。東巴文を続けて深く研究し、国内外での学術会議で、彼の論文はいつもこの主題を中心として、同じ分野の人々に納西族のこの貴重な文化遺産を紹介していました。

彼の研究を経て、東巴文経書は一字で一つの音を表す象形文字以外、大多数の経書は絵文字で描かれたものです。彼は「象形文字は絵文字が生まれ変わり、一字が一つの音節を表す象形文字の新

たな段階に入ったもので、これは納西族文字の一つの重大な発展」と考えておりました。彼は納西族の私たちに与えた豊富で整った、東巴経師が完全に読めて、はっきり解釈できる絵文字の経書に感謝しておりました。私たちは古代の絵文字の類型がこれら絵文字の経書とまったく同じであるとは言えません。しかしながら、私たちはこれらの絵文字の経書が、私たちのこれまで目にするのできた古代絵文字のもっとも価値のある手本ということ間違いなく言えます。

1983年8月に日本での第31回国際アジア北アフリカ人文科学会議に参加した彼が提出した論文は「従納西図画文字看納西族的特点」です。9月に茲嘉はワシントン大学の羅傑瑞、余靄芹両教授の招きに応じてアメリカに期間3ヶ月の訪問をいたしました。先ずハワイで開かれた「言語近代化と『華語コミュニケーション近代化』会議」に参加しました。その時の論文題目は『關於納西族図画文字和音節文字幾個写本中一処正文の校定問題』でした。会議の後、彼はハワイ、ワシントン、コーネル、ハーバード、パークレーなどの大学を訪問しました。特に1週間の時間を割いてワシントン国会図書館に収蔵されている納西族東巴経書を参観しました。彼はその3,000余りの東巴経文を細かく見ることができなかつたため、その中で彼が重要と思った目録を写し取り、写真を撮りました。彼は一日中図書館内におり、図書館の王驥主任の心のこもった接待を受け、じかに彼が再度これらの経書を研究に来よう招かれました。彼は帰国後、納西東巴経師と研究者の参加した代表団で訪米することを準備しましたが、その他の仕事に束縛されて行くことができませんでした。1989年夏休み、私は末娘一家とワシントン国会図書館を訪問しました、善本室の伍国相先生にお会いしましたが、伍先生は私たちが傅懋勳の親族であるこ

とを知ると、同じように親切に私たちを案内して参観させて下さりました。善本室には茲嘉の納西東巴文著作も陳列してありましたが、ただ「納西族絵文字『白蝙蝠取経記』研究」(下巻)のみ欠けておりましたので、後に私は複写して同図書館に一冊寄贈しました。

1990年私が米国の親族訪問から帰ってまもなく、大理白族自治州から劍川での白文(白族の文字)工作会議に参加するように招かれました。会の後に私は特別に麗江東巴文化研究所を訪問しましたが、これは事実上茲嘉が願って叶わなかった願いを完成させたものです。私は彼が米国国会図書館で写してきた納西東巴経書の一部目録と撮った写真、さらに彼が40年代に手書きで書き写した哥巴文と東巴象形文を対照し、国際音声記号で注音して、一部を中国語に訳した経書『祭風経——迎請盧神』を携えて行き、東巴文化研究所に渡しました。老東巴はその『祭風経』を読んで理解することができ、彼らは茲嘉の東巴文字の書く能力に対して高い評価を与えました、特に貴重なことにこの本は研究所の蔵書の中にも無く、研究所では1部複写して残しました。『祭風経』は和発源氏が中国語に訳すことを承知してくださいました(現在すでに訳されて北京に届いています)。将来出版して読者と対面できることでしょう。東巴文化研究所の茲嘉に会ったことのある方もない方もみんなが彼を同じ分野のもの、友人としてみなしてくれました。彼が亡くなってから東巴文化研究所は展示ケースを設けて彼を追悼しております。三人の老東巴がそれぞれ一対ずつ対聯を書いてくださり、そのうち82歳のご高齢の和士成氏はわざわざご自身の手書きの経書を記念にくださりました。東巴文化研究所の和万宝顧問は入院中のところ、他の方に依頼して私の玉峰寺、白沙壁画、三多閣など名所旧跡の参観の付き添いを手配

してくださいました。私が一番忘れがたいことは、お別れの前夜に東巴文化研究所の全員が私のために一卓の盛大な晩餐を用意してくださり、みんなで食べたり話したり、飲んだり歌ったり非常に感動し、私は堪えきれず両目から涙がこぼれました。茲嘉が臨終前に国外で勉強している末娘に「卒業後は東巴文の学習研究に参加するように」という唯一の頼みを思い起こすと、私は彼の東巴文に対するひたむきな深い愛情を身にしみてよくわかりました。

4. ケンブリッジ大学留学

1945年の晩秋のころ、英国ケンブリッジ大学の Laurence E. R. Picken 博士⁽¹⁷⁾ が喜洲の華中大学を訪問されました。博士は中国古典音楽を研究されていました。陰法魯先生もやはりわが国の古楽が好きでしたので、陰先生は同じ分野の者を歓迎するため、都合の良かった我が家で博士をご馳走し、茲嘉もお相伴しました。宴席では主客ともに話に花が咲きました。別れに臨み茲嘉は博士に彼が英語で書いた何篇かの民族言語についての論文を差し上げました。博士は英国に帰られてからケンブリッジ大学東方言語学部主任 Gustav Haloun 教授⁽¹⁸⁾ に茲嘉を紹介いたしました。Haloun 教授は彼の論文を読んでから、喜んで茲嘉をケンブリッジ大学に1年間の訪問教授として招くことに同意いたしました。学部が英国駐中国の文化委員会に推薦の手続きをとりました。ちょうど、この間に英国文化委員会の責任者が逝去したりして、加えて訪問を研究学習の計画に変更したこともあり、1948年になってようやく行くことができました。

状況はこうでした。私たちが結婚してから、続けて二人子供が生まれました。私は家庭と子供が

足手まといになって、ずうっと学校に通う機会がありませんでしたが、主人に頼って生活するのは私の初心ではありませんでした。しかし、茲嘉は生活に迫られて大学院の学業を途中放棄しておりました、そこで私はこの機会を利用してわれわれはそれぞれ終えられなかった学業を完成させるよう提案しました。彼は私の提案を受け入れた後、ケンブリッジ大学の同意を得て、1年の訪問教授補助金を2年の大学院生費用に代えました。当時の英国は第2次世界大戦の傷がまだ癒えてなく、国内では配給制を実行しており、毎週一個の卵が食べられるだけで、生活は相当苦しいものでした。茲嘉は大学で何科目かの授業を聞く以外、授業以外の時間は図書館に入りびたりに民族言語文字に関する資料を読んだり、書き写したりしておりました。当時はまだ複写機が無く、手で書き写すしかできませんでした。茲嘉の学部主任はこの中国人学生の才能と学問を高く認め、一学期が終了しただけで、卒業後彼をケンブリッジ大学の期限なしの教員として任命することを申し出て下さいました。続けて米国の James R. Hightower 教授⁽¹⁹⁾ からも彼をエール大学に教授として迎えたいとの手紙が届きました。彼は私の意見を求めて、私がどこに行くのを望むか尋ねてきました。そのころ解放戦争がまさに行われており、勝利の知らせが次々伝わってきており、雲南は民主運動の大後方でした。私は返事で、どこへも行くことを望んでいない、彼が勉学を済ませたら一日も早く帰国することを望むと伝えました。彼はまた私に手紙をよこして彼が外国にいる機会を利用して出てきてもいいのではないかと、そして、「終身雇用は受け入れられないが、一二年のは受け入れてもいいのではないかと、将来帰国して勤める日々は長いものだから」といってきました。私は再度手紙で、「われわれは解放を向かえる準備をしている、彼

が早く帰国して少数民族のために働き、家族とも団欒できることを望んでいる」と告げました。このようにして、彼はケンブリッジなど一流大学の招聘を断り、論文を書き上げるのに拍車をかけました。1950年8月茲嘉は論文を提出し、時間を割いてスイス、フランスを訪問参観しました。事前に部屋を予約できず、パリに着いたときはちょうどにぎやかな博覧会とぶつかって、ホテルの部屋はすでに満員でした。彼はやむを得ずカフェにいて、夜になったら駅へ行って夜を過ごそうとしていました。おりよくこの時、華中大学の大理の同窓生董寧川さんに出会いました、彼はパリについて割とよく知っており、すぐに茲嘉のために泊まるホテルを探してくれました。順調に何人かのフランスの言語学者を訪問し、パリの名勝を遊覧しました。寧川さんは彼がチェコスロバキアで世界的な進歩的學生組織「プラグの春」に参加したことを茲嘉に語りました。彼ら二人は祖国の解放に自信満々で、帰国して奉仕しようとしていました。寧川さんは帰国後に周恩来総理の2度のジュネーブ会議の通訳を担当いたしました。

1950年10月に茲嘉は論文の口頭試問を通過してケンブリッジ大学の哲学博士学位（言語学は単独の学科ではなかった）彼が論文で書いたのは『彝語描写語法』でした。彼は英国学士院に会員として認められました。彼は英国滞在中、いつも新聞や雑誌で新中国解放のニュースを見ておりました。彼は新聞で英国軍艦「HMS Amethyst」号⁽²⁰⁾が長江で解放軍の南下を阻止しようとしてわが方に撃沈された報道を見た時には、意気揚々として、中国人が帝国主義の圧迫を受ける日がもう二度と来ないと喜んだのでした。特に彼が心服したのは華中大学の英国籍の教務長だった康生坦先生が、英国に帰国後書いた文章で、解放軍の規律がよいことを述べていることでした。

茲嘉は11月の船の切符を購入し、1ヶ月余り航海して香港に到着しました。船着場では早くも同郷の稽海懐先生が出迎えに来ておりました。稽先生は香港の新聞で初めて彼が帰ってくるのを知ったのです。彼が祖国の入り口深圳に足を踏み入れた時、五星紅旗が風を受けてはためいているのを見て、気持ちはこの上なく興奮しました。彼は親族と祖国の呼びかけに背くことなく、1950年年末に解放後の新中国に帰り着いて、自分の学んだ言語学の知識をすべてわが国の少数民族の文化教育事業に捧げようとしたのでした。

5. 学業のためにそれぞれの道

1948年夏、茲嘉と私はそれぞれ学業を完成させるために、しばらく分かれて東奔西走しておりました。彼は華中大学を離れ、上海から船で英国に向かい、私は娘を連れて雲南に帰り、姉婿が借りていた北門街の宿舎に泊まり、転校試験を通過して、順調に雲南大学文史学部3年生となりました。当時雲南は學生運動の大後方で、姉婿の馬曜と私と同姓の知人徐嘉瑞教授は學生運動の鎮圧に反対して雲南大学を解雇されました。ちょうどこの時に昆明師範学院中国言語文学系の主任羅庸教授が重慶に招かれて講義に行ってしまったため、徐先生が代わって学部主任の職に就かれ、彼らは西倉坡の師範学院教授宿舎に移り住んだ後、私と一緒に住むように言いました。私は雲南大学で授業を聞くほか、師範学院に行き徐先生の『詩経』の講義も聴きました。雲南大学と師範学院の民主的な雰囲気感化され、進歩的な親戚友人学友の思想の影響下、私も政治の民主自由、反飢餓、反迫害の行列に加わりました。1949年12月雲南武装蜂起が起り、解放軍は1950年初め雲南に入りました。卒業クラスの學生たちは師範学院の學生と

一緒に、「夏期学校」を組織して党と人民政府の政策法令を学びました。学習がまだ終わらないうちに、私ともう一人の学友は繰り上げて雲南人民放送局編集部の編集補佐兼文教グループ班長として配属されました。

ある日私が外に取材に行きかえってくると、みんなは喜んで私に告げました。張沖副省長の秘書丁朗氏が私を訪ねてきたそうです。丁朗氏は華中大学中国言語文学部の学生でした。本名は楊增魁といい、1947年武昌で卒業後すぐに解放区に行って活動しました。私は何で彼が私を探しているのかわかりませんでした。数日して彼は車を迎えによこし翠湖そばの副省長の家まで行きました。張沖氏は彝族で、省では民族関係の仕事の責任者でした。彼は早くから雲南は全国で民族が一番多い省で、文化教育は少数のいくつかの民族を除いて、多くが立ち遅れている状態を知っていました。少数民族のこのような状態を改善するためには、民族の言語や文字を重視しなければなりません。丁朗氏は張沖氏に彼の先生である茲嘉のことに触れました、このため私と相談して手紙を茲嘉に書いて雲南に帰って民族言語文字の仕事に従事するようにしたかったのです。当時はすでに中英両国間で郵便が通じず、彼が雲南に戻って働くことを誘う電報を私の名義で省が出したのです。前にも述べましたように、茲嘉のケンブリッジ大学に行くすべての費用は英国文化委員会が提供する1年間の訪問教授援助金です。時間的に言うと、彼の1年目は教授のサバティカル（ Sabbatical ）の時間を利用し、国内の給料は普段通りに出され、それ以降は大学の休みを取ることにになります。茲嘉は帰国後まず華中大学に帰り報告後、それから他に移動すべきです。韋卓民学長は彼が大学に戻ってきたことを喜び、彼の学部主任の職務を復活させ、彼を手放そうとはしません。茲嘉の恩師羅常培先生は中国

科学院言語研究所で所長をしており、研究所は中国語（漢民族の言葉）研究以外に、さらに少数民族の言語研究をしようとしており、羅所長は茲嘉に北京で働くよう望んでおりました。三ヶ所がみんな彼の来ることを希望しておりましたが、どこに行くべきでしょうか。雲南は彼の第2の故郷で、そこには彼の身内と少数民族の言語文字の仕事があり、調査が待たれています。長年華中大学で働いており、帰国後は学校に務めを果たしてから移るべきです。しかし、羅先生は自分の恩師で、仕事上の必要に背くこともできません。彼は華中大学執行部と学部の学生に、「学部には彼より優れた教師も多いが、民族言語研究に従事するものは、余り多くいません」と説明しました。仕事の面から見て、学生たちが先ず彼の要求に同意し、彼のために学校を説得しました。彼はまた雲南省に手紙を書いて、先ず北京でしばらく働いて、それから雲南に戻ると考えを示しました。1951年春に彼は北京に転勤しました。彼は華中大学では3級教授で、月給1,400斤の粟（人民元約140元相当）でした。羅先生は茲嘉に言いました、「君の給料が某先生と同じではまずいので、君は4級にするのが良い」。茲嘉はこれについて不満を言いませんでした。6年後の1956年になって、全科学院での給与調整で、元の3級に戻りましたが、1988年に彼が亡くなるまで昇給したことはありませんでした。1951年に私と子供は北京行きましたが、羅所長は私に研究所で働くように言いました。研究所は供給制（現物支給）をとっておらず、このため私の月給は粟300斤となり、職稱は研究員見習いでした。これから私たち夫婦は同じ言語研究所で働くことになりました。同じ研究所で働いていることは便利ですが、しかし私がつらい思いをしたこともあります。研究所内には四つのグループがあり、茲嘉は第4グループ少数民族の仕事の

責任を持ちました。羅所長の具体的な指導の下、新しい仕事が始まりました。1951年から1952年の1年近くの期間は「三反五反」⁽²¹⁾の政治学習がほとんど半分の時間を占めてしまいました。残った時間は主に二つの仕事をしました。(1)言語研究所で「民族言語訓練班」を開講しました。受講者は言語研究所と北京大学から来ておりました。羅所長が言語学の講義をし、楊誠志教授が民俗学を講義し、さらに中央民族委員会の指導者が民族政策、茲嘉が音声学、言語調査を講義しました。私もこの業余訓練班の学習に参加いたしました。教室には何人かの少数民族の受講者がおり、われわれの言語も音声記録の対象でした。この班で訓練を受けた受講生は、後に民族言語研究の新たな力となりました。(2)中央民族学院が民族言語学部を開設し、大学生を募集する準備をして、言語研究所第4グループのメンバーに何種かの言語のテキストの編集の責任を持ってもらうことになりました。茲嘉と涼山彝族の教師羅家修、羅伍阿施ほか協力して彝語のテキストを編纂し、同時に納西族の二人の教員和即仁、和志武を指導して納西語のテキストを編纂し、私はそばでこの2種類の言葉の音声の記録を練習しました。彝文のテキストはやはり彼が自らガリ版を切りました。新中国の民族平等政策の指導の下、民族言語が初めて大学の教室に現れ、これは彼を興奮させるとともに、誇りを感じさせました。

6. 三度目の雲南

雲南省民族事務委員会のたびたびの招請があり、郭沫若科学院院長の承認を経て、言語研究所は言語調査グループを派遣することになりました。グループのメンバーは周躍文（漢民族）、安榮（彝族）、徐琳（白族）で、茲嘉が引率者となりまし

た。1952年初め北京を出発、周、安の2名が汽車に乗って陸路先行し、私たちは武漢経由で、船で重慶に行き、さらに飛行機で昆明に向かいました。武漢からは西南民族訪問団の代表チベット族の天宝、涼山工作委員会の梁文英、雲南怒江工作委員会の張旭らの同志も同行し、道中彼らに世話をさせていただきました。春城（昆明の別称）に着いたのは正に陽春三月、さまざまな花があでやかさを競う季節でした。私たちは春の希望を胸一杯に雲南の民族言語の仕事に身を投じました。

張副省長は私たちを省涉外処に迎えた後、われわれに宿舎を選ばせました。私たちは民族委員会青雲街282号の宿舎を選びました。仕事場所は雲南民族学院の中を選びましたが、これは民族学院には各地から来た少数民族の学生がいて、彼を対象に言語調査ができるからであります。民族学院の指導者はわれわれの仕事に条件を提供してくれました。われわれの言語工作は全省民族工作規則に則って、すなわち「先ず辺境、後に内陸、先ず集まって住んでいるところ、後に分散しているところ、先ず大きいもの、後に小さいもの」の方針に基づき手配しました。

重点を傣族（タイ族）（徳宏「傣徳」と西双版纳「傣仂」金平「傣緬」を含む）、佤族（ワ族）、拉祜族（ラフ族）、景頗族（チンポー族）、傈僳族（リス族）、哈尼族（ハニ族）、阿昌族（アチャン族）、怒族（ヌー族）等の民族の言語と文字使用状況の調査を行いました。彝族は内陸でありましたが、しかし特に安榮さんを配置して方言と文字の収集を行いました。民族委員会と民族学院の語文工作の人々もしばしば業務上の手助けを茲嘉に頼みました。事務室は各民族の学生があふれていました。いつも授業終了のベルがなると、キャンパスでは一人の若者が一人の中年の人の肩を抱き、とても親しく話しているのを見かけました。彼等

は佤族の学生とちょうど佤語の研究をしている茲嘉でありました。当時政治学習と仕事とはともに大変きつかったため、日曜日だけが1日丸ごと仕事に当ることができました。そこで茲嘉はいつも協力者を宿舎まで招いて仕事をしていました。1953年童偉同志がグループに転属して来て、茲嘉は彼と共著で『漢語速成識字課本』を編纂しました。茲嘉は自分自身が民族学院で授業をして、この経験を後に「一個速成漢語実験教学的総結」(中国語文 1953年12月号)として書きました。1954年に言語研究所では常弘恩、劉璐の両氏を雲南に増派して仕事の強化を図りました。雲南民族学院の傣族幹部の刀忠祥さんはずっと茲嘉の仕事に協力してくれました。彼は傣語の『宣慰史司地方志』を中国語に訳し、さらに大量の語彙と文法資料を記録しました。前後して刀世勳ほか数人とも協力して『西双版纳傣文改進方案』、『西双版纳傣語常用語彙』、『雲南省西双版纳允景供傣語的音位系統』を書き上げました。彼はさらに雑誌『旅行家』に「西双版纳自治区」という題で、この雲南省南部の小都市の民俗を紹介し、文中で「西双版纳」という中国語音訳語の傣語の意味が「十二千田」であることを示しました。南亜語系モン・クメール語族はわが国では雲南省内の佤、濮曼、緬龍等の民族のみがこの言葉を使っており、彼等はみな辺境にすんでいます。このため茲嘉は傣語を研究すると同時に佤語、布朗語に対しても研究を行いました。佤語の音位系統は比較的複雑で、茲嘉は『佤語音位系統』の一文を書き、謄写版で印刷して佤族の教師の教育参考用に提供しました。

茲嘉は雲南での3年近くの期間に、現地の党と政府の指導の下、若干の具体的な仕事をする事ができました。彼の『雲南省少数民族語文的基本狀況和我們的任務』(『中国語文』1952年12月号

収録)の文中の言葉で紹介すると次のようです。

「少数民族がその言語と文字を發展させるのを助けて、われわれは以下の数項目の仕事をきちんとしなければならぬ。

- (1) 方言と文字の状況を調査研究する。
- (2) 文字を充実させるか、制定してこれを普及させる。
- (3) 少数民族の言語文字の読み物と辞典を翻訳編纂する。
- (4) 少数民族の言語文字業務の幹部を養成する。

茲嘉は調査研究を通して、基本的に雲南省民族の言語、方言、文字の使用状況を把握しました。すでに文字を有する言語に対しては、重要性和緊急性に気を配りながら簡単などころから難しいことへと段取りよく進め、編集の仕事を行います。茲嘉は自ら多くの党の政策の宣伝と通俗読み物の翻訳に参加しました。そして、広範な人民が使うには欠点がある元からの文字については、大衆の同意を経た上で、充実させるか或いは改革プランを定めました。1954年に彼と刀世勳、刀忠強、童偉の三人の同志は西双版纳に深く入って傣語の調査を行い、傣族大衆に傣文字改革の意見を求め、自ら新しい傣語の文字を学ぶ訓練班を作り、学習経験を総括しました。茲嘉はさらに雲南大学社会学部で言語と民族語調査の授業を教授しました。この期間纳西族の周汝誠先生、佤族陳学明、拉祜族彭志清、景頗族岳相昆などの少数民族語の教師を推薦し、彼等は中央民族学院に行って研究と教育にあたりました。われわれ研究所のために西双版纳傣族の刀世勳、德宏傣族の龔肅政、傣僳族の木玉璋、白族の趙衍蓀、楊朝源等を選抜し研究人員としました。茲嘉は土地改革において纳西族の東巴經、彝族の彝經が封建的迷信の品物として焼却されていることを聞くと、直ちに民族委員会秘書長の呉少黙同志にこれらの文化遺産を必ず保護

するように意見を伝えました。1954年雲南の民族の区分の識別に歩調を合わせて、言語調査グループの人力を投入して調査しました。後に北京に戻っても、茲嘉はやはり雲南の仕事をはっておかず、彼の収集した傣語資料を刀、童の兩名に渡し辞典、文法書を共同で編纂しました。さらに西双版纳から招いた刀効忠同志も仕事に協力しました。景頗語、傈僳語に対する研究についても機を逸せず指導しました。さらにたびたび調査や会議に参加するために雲南に戻りました。

7. 実現しなかった計画

十年の大災禍⁽²²⁾、茲嘉は五十過ぎで正に彼が少数民族の言語文字研究にいくらかでも貢献できる時でした。しかし、嘆かわしいことに彼は昼間には労働や批判闘争をさせられ、夜が来ると皮の鞭で打たれたり、麻縄で縛られたり、数十万字の自白書を書くよう強要されました。ファシズム的暴行によって、体中傷だらけになり、左耳は聞こえなくなり、首の後ろには罪深い爪できつくつねられた跡が残っています。王均先生⁽²³⁾は追想の会で次のように言われました。「文化大革命の十年が過ぎた後、これまでずっと元気あふれるばかりで、風采が洒脱の傅懋勳先生がなんといっぺんに二十歳も老けてしまわれた」。

「四人組」が打倒され、茲嘉は心と体の傷跡を忘れ、百倍の努力をもって、あの失われた時間を取り戻そうとしました。彼は研究所のために民族言語文字研究業務の計画を練り、『民族語文』創刊号で『全面开展民族語言研究』を発表して10個の研究項目を提出しました。彼自身も一つの計画を決めました。(1)私を連れて大涼山彝区を訪問し、結婚前の約束を実現し、同時に彝語彝文字の補充調査を行う。彼はさらに彼の論文を補充しよ

うとしたのです。彼が発表した民間伝説や詩歌は彝文の原文を翻訳して発表したものですが、「文革」中に彼が苦勞して収集した、それら彝語の資料はすべて家宅捜索で没収されてしまったのです。現在彝族には規範的な彝文字があり、彝文字で書籍や雑誌を出版することができます。彼はそれら失われた彝文を涼山で探しだして補い、彝族の読者が研究し、鑑賞できるようするつもりで、さらに博什瓦黒に行き南詔、大理国時代の石刻群を參觀することです。(2)四川と雲南の境にある寧蒗県に行き、納西族、彝族の家庭を訪問し、滬沽湖に遊ぶ、さらに麗江東巴文化研究所に向い、獅子山のふもと、黒龍潭のほとりに半年滞在し、老東巴と納西族の研究者と東巴経文をお互いに磨きあう。(3)麗江から南下して劍川金華鎮に至り、沙溪石宝山、西中村白文学校を訪問する。洱源、鄧川に沿って南下して、四十数年前私たちが知り合って、愛の巣があった場所、大理喜洲の以前住んでいた土地をまた旅行することでした。さらに白語白文字資料を収集して、『白族語言』を書くことです。茲嘉は帰国して38年近く働きましたが、一度の休暇を取ったこともありませんでした。1983年私たち一緒に青海へ行き「全国民族語文論文撰写進修班」の教育に参加した外は、いつもそれぞれ自分の仕事に忙しかったのです。私たちが定年退職した後にはやっと一緒に出かけることができるであろうという、この美しい願いがまだ実現しないうちに、彼は1988年この世を去ってしまったのです。哀れ9月13日の夜、死に別れとなった最初の宵でした。

往年を思えば茲嘉が民族語文を学び研究したのは雲南から始まったのです。雲南のさまざまな言語文字が彼の視野を広げ、彼の成長を育んだのです。彼は雲南に深い感情を抱き、彼は白族のよい娘婿であったばかりか、各民族の気心の知れた友

人でもありました。彼が一生追い求めたのは、わが国の民族の平等、民族の文化的資質を高めるというこの目標のために絶えず努力したのです。

私は茲嘉の影響と彼自身の指導を受けて、僑僱族と白族の言語文字の仕事に従事して満40年になりました。彼はこの世を去りましたが、私と子供たちは彼の遺志を継いで、民族の仕事、教育の仕事の持ち場で発奮して頑張ります。茲嘉の地下の霊が安らかでありますよう。

注

- (1) この翻訳の原文は1992年1月に雲南省大理市で発行された『大理文化』1992年1月号に掲載された『蒼山洱海恋 玉龍雪山情』に徐琳先生が追加訂正を加えたものである。
- (2) 華中大学：華中師範大学の前身。英米の教会が20世紀前半に中国に開設したミッション系14大学の一つである。華中大学の名称で武昌で開設されたが、日中戦争中は雲南省大理に疎開していた。
- (3) 包漁荘：包鷺賓，字漁荘。1899-1944年。北京大学哲学学部卒。1931年に華中大学中国言語文学部主任に就く。華中大学では諸子研究，尚書研究，中国古代文論，文心彫龍などの授業を担当。
- (4) 白族：ペー族。主に雲南省に居住する中国少数民族。
- (5) 納西族；ナシ族。雲南省，四川省に居住する中国少数民族。
- (6) 昆華女学校：昆華女子中学。現在の昆明28中学，現在雲南省唯一の女子完全中学（中高一貫教育の学校）。
- (7) 韋卓民：1888-1976年，解放前に文華大学教授，華中大学学長等を歴任。中国著名の哲學家，教育家。
- (8) 陰法魯：1915-2002年。北京大学文化研究所修士。北京大学中国言語文学部教授。専門は中国古代音楽舞踏の研究。
王玉哲：1913-2005年。華中大学助教授，湖南大学教授，南開大学歴史学部教授。専門は先秦史学。
- (9) 羅常培：1899-1958年。北京大学中国言語文学部卒。西北大学教授，北京大学教授，中国科学院言語研究所所長。専門は音韻学，少数民族言語研究，方言調査の研究。
- (10) 西南連合大学：日中戦争中に雲南省昆明に設置された北京大学・清華大学・南開大学の連合大学。1938年5月から1946年5月までであった。
- (11) 李方桂：1902-1987年。中国系米国人。シカゴ大学博士。ハワイ大学教授，シアトルワシントン大学教授。言語学者。
- (12) 丁声樹：1909-1989年。北京大学中国言語文学部卒。中国科学院言語研究所研究員。専門は中国語文法，音韻学，古代中国語などの研究。
- (13) 華西大学：華西協合大学。1950年に華西大学に名称変更。英米の教会が20世紀前半に中国に開設したミッション系14大学の一つである。
- (14) 経師：東巴あるいは老東巴とも言う。納西族の知者（祭司）として代々東巴經の経書を伝えてきた。
- (15) 三大ストーブ：夏季特に暑い長江沿岸の南京・武漢・重慶をストーブにたとえて言う。
- (16) 当代中国民族語言学家：昭那斯因 李恒朴 主編『当代中国民族語言学家』青海人民出版社，1989年。517-527ページ。
- (17) Laurence E. R. Picken：1909-2007年。ケンブリッジ大学教授。科学者。専門は中国，東洋音楽などの研究。
- (18) Gustav Haloun：1898-1951年。専門は諸子，管子などの研究。
- (19) James R. Hightower：ハーバート大学教授。専門は中国古代詩研究。
- (20) HMS Amethyst：英国軍艦。長江を渡って南下する人民解放軍を妨害しようとして砲撃を受け座礁した。
- (21) 三反五反：党・政・軍の汚職・浪費・官僚主義に反対する「三反運動」，贈収賄・脱税・横領・手抜き・国家の経済情報の漏洩に反対する「五反運動」を合わせて総称する。
- (22) 十年の大災禍：プロレタリア文化大革命，「文化大革命」あるいは「文革」とも言う。1966-1976年にあった中国の政治権力闘争。
- (23) 王均：1922-2006年。西南連合大学中国言語文学部卒。中国社会科学院研究生院教授。専門は少数民族言語，音声学，応用言語学など。